【あ】

❖**噫**（あい）

噯気のこと。〈『霊枢』口問篇〉 ☞噯気（あいき）

❖**噫気**（あいき）

噯気のこと。〈『傷寒論』弁太陽病脈証併治〉 ☞噯気（あいき）

❖**噯気**（あいき）

気体が胃中から咽喉に向かって上逆*し，音を伴う症状（げっぷ）を指す。〈『丹渓心法』噯気〉 その音は重くて長く，呃逆*のような急迫して短い音ではない。【参照】☞呃逆（あくぎゃく）。噫，噫気ともいうが，現代では多くの場合，噯気と呼んでいる。脾胃虚弱により起こるもの，胃に痰火があるために起こるもの，食滞*により起こるものがある。脾胃虚弱によるものは，四肢倦怠・食欲減退・舌質淡・舌苔薄・脈沈細などの症状を伴い，虚証に属する。胃に痰火があるために起こるものは，胃脘部の熱感・口乾口渇・舌質紅・脈数などの症状を伴い，実証に属する。食滞によるものは，食欲減退・口臭・脈滑などの症状を伴い，実証に属する。ただしどのような原因であれ，その発生のメカニズムは，気機が阻滞されて昇降が失調し，胃気が正常に和降できず，かえって上逆することにある。

❖**噯腐酸臭**（あいふさんしゅう）

「噯腐」とは，酸腐臭を伴う噯気*（げっぷ）を指す。「噯腐酸臭」とは，胃内に停滞した食物の腐敗したにおいが口臭となって現れる症状である。本症の多くは，飲食の不摂生で脾胃を損傷し，脾胃虚弱になって食物を消化できなくなり，食物が胃の中に停滞して発酵し，胃気が上逆*することにより発症する。【詳細】☞傷食（しょうしょく）

❖**呃逆**（あくぎゃく）

古代には，呃（あく）と呼ばれていた。俗にしゃっくり，打呃忒（だあくとく）ともいわれる。「呃」とは，一種の音を指し，「逆」とは，上逆*を指す。喉中で音がし，その音は短く，頻繁に連続し，途切れず，自制できないなどの主症状がみられる病証である。〈『万病回春』巻三〉 本病証は，偏食・過食，あるいは寒涼の薬物を摂りすぎたり，あるいは情志失調のために，肝気不舒となって肝気が胃を犯し，胃気が上逆して起こる。さらに慢性病や重病により，胃気を損傷し，胃気が上逆しても起こる。治療では寒熱虚実を分け，和胃降逆気・止呃逆を主な治法とする。呃逆のうち実証に属するものでは，胃寒には温中散寒，胃火には清降泄火を行う。虚証に属するものでは，陽虚には中焦の陽気を補い，陰虚では養胃生津をはかる。針灸治療では足陽明胃経の経気調節を主とする。呃逆は，胃寒呃逆*・胃火呃逆*・気鬱呃逆*・陽虚呃逆*・陰虚呃逆*などに分類される。

呃逆と噯気*は，ともに胃気上逆により起こる。【参照】☞噯気（あいき）。ただし呃逆の病状のほうが噯気よりも重い。前者は肝胃不和によるものが多く，後者

は食滞*や痰火によるものが多い。

▶**胃火呃逆**（いかあくぎゃく）

胃熱熾盛・胃火上逆によって胃気が上衝し，しゃっくりが起こる病証を指す。症状としては，しゃっくりの音が大きく有力である・顔色は赤い・口が乾く・口臭・水を飲みたがる・心煩・小便の量は少なく黄赤色・大便乾結・苔黄・脈洪数がみられる。本病証の多くは，辛いものや温燥の薬物を摂りすぎることにより，胃腸に熱が蓄積し，胃火が上衝することにより発症する。治療では，降火和胃・止呃を主とする。竹葉石膏湯を主方として加減を行う。針灸治療では，内関・足三里・巨闕・膈兪・合谷などの経穴に瀉法で刺針を行う。

▶**胃寒呃逆**（いかんあくぎゃく）

寒邪犯胃によって胃気が上衝し，しゃっくりが起こる病証を指す。症状としては，しゃっくりの音が沈んで緩慢かつ有力である・温めるとしゃっくりが減弱し，冷えると悪化する・四肢が冷える・食事量が減少する・水様便・苔白潤・脈遅緩がみられる。本病証の多くは，寒邪が胃腑を侵すか，あるいは生もの・冷たいもの・寒涼の薬物を摂りすぎることにより引き起こされる。寒気が胃の中に留まり，肺胃の気が和降できなくなると，気逆が起こって発症する。治療では，温中祛寒・止呃を主とする。丁香散を主方として加減を行う。針灸治療では，内関・足三里・膈兪・胃兪・上脘などの経穴に瀉法で刺針を行う。灸を加えてもよい。

▶**陰虚呃逆**（いんきょあくぎゃく）

胃陰不足により，胃気が上衝し，しゃっくりが起こる病証を指す。症状としては，しゃっくりの音は短く無力で，慌ただしく頻発するが連続しない・口咽乾燥・心中の煩躁*・疲れやすい・舌紅で乾燥し裂紋があるか，または剝苔無苔・脈細数がみられる。本病証は主として，熱病で胃陰を損傷して胃陰不足となり，そのため胃が濡養を失い，和降できなくなることにより発症する。治療では，滋養胃陰・生津止呃を用いる。益胃湯を主方として加減を行う。

▶**気鬱呃逆**（きうつあくぎゃく）

肝気の鬱滞が横逆して胃を犯し，胃気が上衝してしゃっくりが起こる病証を指す。症状としては，しゃっくりに声が混じる・咽喉の不快感・常に情志の刺激により誘発または悪化する・胸悶・胸肋部の脹満・食事量が少ない・腹鳴・放屁が多い・苔薄白・脈弦がみられる。本病証の多くは，ストレスにより肝気不暢となって肝気犯胃となり，胃気が上衝することにより発症する。治療では，順気解鬱・降逆止呃を主とする。五磨飲子を主方として加減を行う。針灸治療では，内関・足三里・膈兪・陽陵泉・太衝などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

▶**陽虚呃逆**（ようきょあくぎゃく）

脾胃陽虚・中焦虚寒により胃気が上衝し，しゃっくりが起こる病証を指す。症状としては，しゃっくりの音は低く弱く無力・息切れ・顔色蒼白・手足は氷のように冷たい・疲労倦怠感・疲れやすい・舌淡白・脈沈遅で無力がみられる。本病証は，重病や慢性病，あるいは吐法や下法を誤って用いたことにより，脾胃の陽気を損傷し，清気を昇

らせて濁気を降ろすことができず，虚気が上逆して発症する。治療では，脾胃の陽気の温補・和中降逆を主とする。理中丸を主方として加減を行う。針灸治療では，内関・足三里・巨闕・膈兪・脾兪・章門などの経穴に，補法あるいは平補平瀉法で刺針を行う。

❖**悪血**（あくけつ）

悪血とは壊死した血液のこと。経脈外に溢れて組織間に溜まった壊死血液をいう。〈『素問』刺腰痛篇，『霊枢』水脹篇〉　瘀血ともいう。☞瘀血（おけつ）

❖**悪証**（あくしょう）

善証*とは逆に，外科疾患の過程で，毒邪の勢いが強く，正気が衰退しているために発生する重篤な症状である。瘡面が汚濁し，激痛や麻痺を伴い，瘡口がなかなか癒合せず，昏迷・譫語・痙攣・極度の羸瘦・呼吸困難・飲食減少などの全身症状を伴う。予後は不良である。

❖**悪瘡**（あくそう）

①外科病名。久悪瘡，悪毒瘡，頑瘡ともいう。膿液が多く深刻で難治な外瘍を指す。病程が長引く，病位が深い，範囲が広い，収斂しにくく難治であることを特徴とする。多くは風熱が湿毒の気を挟んだもので，真っ赤に腫れて痛痒感があり，潰爛（かいらん）した後には浸潤が止まらず，長期間経過しても治らない。黄耆散（黄耆・石膏・知母・麦門冬・白芍・茯苓・桂心・熟地黄・人参・升麻・炙甘草）の内服，麝香膏（麝香・青黛・黄柏・雄黄）の塗布が行われる。②悪性腫瘍には，難治である，再発しやすい，転移しやすい，死亡率が高いという特徴があることから，これを悪瘡と称する。③郭璞将著（かくぼくしょう）『山海経（せんがいきょう）』に記載されている「癘」を悪瘡と称する。④小児科病証名。小児瘡瘍で，膿血が長期間腐敗して治癒しない病証を指す。

❖**足厥陰肝経**（あしけついんかんけい）（巻末図12）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉【循行経路】第１趾背面の叢毛の所（大敦穴）に端を発し（足少陽胆経の経気を受け継ぐ），上に向かい足背内側縁に沿って内果の前１寸の所に達する。脛骨内縁に沿って上に行き，内果から８寸上の所で足太陰脾経と交差して足太陰脾経の後側に行く。膝関節内側を経て，大腿内側に沿ってさらに上に向かい，鼠径部を経て陰毛の中に進入し，生殖器を繞（まと）って下腹に達する。次に胃の外側を上に向かい肝臓に属し，肝と表裏関係にある胆に絡す。再び上へ向かい，横隔膜を貫いて胸腔に入り脇肋部に分布した後，気管・喉頭の後面に沿って上に向かい，咽喉部に入って眼の後ろを通過し，目系（眼球の後部に出入りする神経や血管などの組織）に連接する。つづいて上に向かって前額部にいたり，頭部の後ろに向かい頭頂に達して督脈と会する。その支脈は，①目系から別れて下行し頬部に達し，口唇を一循りする。②肝臓から別れ出て横隔膜を貫き，胸腔に入って肺に分布し，手太陰肺経に連接する。【本経に現れる主な病証】主に頭・眼・胸脇・腹部・下肢内側の病証など。例えば，脇肋部の脹満疼痛・下痢・尿閉*などの治療に本経に属する腧穴を取穴する。

❖**足三陰経**（あしさんいんけい）

十二経脈の中で下肢内側を循行する

足太陰脾経・足少陰腎経・足厥陰肝経を指す。これら３本の経脈はいずれも人体の内側という陰にあたる位置を走行しているので陰経*に属し，さらに循行方向がいずれも足部から下肢内側，腹部を通って胸部に止まるので足三陰経という。

❖**足三陽経**（あしさんようけい）

十二経脈の中で下肢外側を循行する足陽明胃経・足太陽膀胱経・足少陽胆経を指す。これら３本の経脈は，いずれも人体の外側という陽にあたる位置を走行しているので陽経*に属し，さらに循行方向がいずれも頭部から体幹部，下肢外側を通って足部に止まるので足三陽経という。

❖**足少陰腎経**（あししょういんじんけい）（巻末図８）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉【循行経路】第５趾の下面に端を発し（足太陽膀胱経の経気を受け継ぐ），斜めに足心の湧泉穴に行き内果後縁に達し，つづいて踝踵に入る。そこから下腿内側後縁に沿って上行し，膝窩内側を通り大腿内側後縁に沿ってさらに上に進み，脊柱内（長強穴）に進入する。次に，脊柱を貫いて腰部に達し，腎に属し，腎と表裏の関係にある膀胱に絡う。その直行する幹線は，腎臓から出て肝と横隔膜を貫いて上行し，胸中に進入し，喉頭に沿って行き舌根に達する。その分支は，肺から出て，心臓に連絡し，脈気が胸中に注がれ，手厥陰心包経に連接する。【本経に現れる主な病証】主に泌尿器・生殖器・咽喉・肺などの病証。例えば，喘息・咳嗽・咽喉部の腫脹疼痛・腰筋の疼痛・下肢の無力など本経に関する病証の治療には，循経取穴の原則に則って本経に属する腧穴を取穴する。

❖**足少陽胆経**（あししょうようたんけい）（巻末図11）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉【循行経路】眼の外眼角の瞳子髎穴に端を発し（手少陽三焦経の経気を受け継ぐ），下外方に向かい耳前の聴会穴から，上に折れ曲がって額角にいたった後，下行して耳後を繞り完骨穴に達する。つづいて上に曲折し頭額を経て，眉毛上方の陽白穴にいたると，また後方に折れて耳後から風池穴に達する。さらに頸部を下行し手三焦経の前を進んで肩上にいたり，大椎穴の所で督脈と交わる。また，前方に折れて缺盆（鎖骨上窩）に進入し，下に向かって胸腔に入り，横隔膜を貫いて腹腔に進入し，胆と表裏の関係にある肝臓に絡し，つづいて胆に属する。その後，再び脇肋の裏面に沿って鼠径部の気街穴（大腿動脈の拍動部位）に出て，陰毛の周囲を廻り，横へ行って股関節部に入り，大腿外側を下へ行って腓骨下方にいたり，外果の前面に出て足背に沿って第４，第５中足骨の趾縫の間に進入し第４趾外側先端の足竅陰穴に達する。その分支は，①耳後から耳中に進入してから耳前に出て，再び外眼角の後方に出る。②外眼角から別れ出て下に向かって大迎穴に達し，さらに上行して頬骨部に出てからまた下に向かい，頬車穴を経て頸部を下り缺盆に入って本経の主脈と交会する。③缺盆から出ると腋窩に向かって下り，さらに側胸部に沿って下行して季肋部を通過し，股関節部に達

して本経の主脈と交会する。④足背から別れ出て，第１，第２中足骨の間に沿って，第１趾の外側端に達し，戻って第１趾の背面の叢毛の所（大敦穴）に出て，足厥陰肝経に連接する。**【本経に現れる主な病証】**主に側頭部・眼・耳・咽喉部・胸肋部・下肢外側部の病証。例えば，頭痛・胸肋痛・下肢外側などの疼痛や運動障害など。本経の病証の治療には，循経取穴の原則に則って本経に属する腧穴を取穴する。

❖**足太陰脾経**（あしたいいんひけい）（巻末図４）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉 **【循行経路】**第１趾内側端（隠白穴）に端を発し，足内側縁に沿って内果前方に達し，つづいて下腿内側正中線に沿って上行し内果の上８寸の所で足厥陰肝経と交会し肝経の前方を行く。さらに上に向かい膝関節部を通って大腿内側前縁を進んで鼠径部に進入し，つづいて腹腔に入り脾に属絡するとともに，その支脈を通じて脾と表裏の関係にある胃に絡す。次に上に進んで横隔膜を貫き，食道の両傍に沿って上行し舌根に連なり舌下に散る。その分支は胃から別れ出て横隔膜を貫通して胸部に入り，心中に流注して手少陰心経に連接する。**【本経に現れる主な病証】**主に脾胃の病証として現れる。例えば，胃脘部の脹満・嘔吐・食物が下らない・げっぷ・水様便・下肢内側の腫脹，疼痛，冷えなど。臨床治療では循経取穴の原則にもとづく取穴法がよく用いられる。

❖**足太陽膀胱経**（あしたいようぼうこうけい）（巻末図７）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉 **【循行経路】**内眼角の睛明穴に端を発し（手太陽小腸経の経気を受け継ぐ），上に向かって前額正中を通り頭頂の百会穴に達して督脈と交会する。その後，頭頂から脳中に入り，頭蓋から出て左右に分かれ項部（天柱穴）に達し，肩甲骨内側に沿って下り，脊柱の両側（脊椎棘突起から1.5寸）を挟んで下行する。腰部を通り腎兪穴のところで脊柱の両側の筋肉中に入り，腹腔内に進入して膀胱と表裏関係にある腎臓を絡い，膀胱に属する。その分支は，①頭頂の百会穴から別れ出て後下方に向かって耳上角に達する。②腰部から引き続き脊柱の両側に沿って下に向かい，第21椎の傍らに達したら斜め上に向かって第１後仙骨孔にいたり，下行して第２，３後仙骨孔および尾骨の傍らを経て臀部を貫通する。つづいて大腿外側後面に沿って膝窩（委中穴）にいたる。③項部から下に向かい肩甲骨内縁に沿って下行し，脊柱両傍（脊椎棘突起から３寸）に並行して行き，股関節部に達する。さらに大腿後面中間を下り膝窩にいたり，②の支脈と会合する。それから，再び下へ行き，腓腹筋内を通り足外果後面に出てから，足背外側縁に沿って第５趾外側端（至陰穴）に達し足少陰腎経に連接する。**【本経に現れる主な病証】**主に頭項部・眼・耳・鼻・腰脊および下肢後部の病証。例えば，頭痛・腰脊痛および経絡循行上の疼痛などの治療には，本経に属する腧穴を取穴する。

❖**足陽明胃経**（あしようめいいけい）（巻末図３）

十二経脈の１つ。〈『霊枢』経脈篇〉 **【循行経路】**鼻翼の傍ら（迎香穴）に端を発

し，鼻に沿って上行し鼻根部で左右が交わり，傍らに向かって足太陽膀胱経と交会する。下に行って鼻柱外側を進んで上歯中に入り，歯から出て口唇を繞り，頤唇溝の承漿穴の所で左右が交会する。さらに外方に向かって行き，下顎角に沿って進んで大迎穴に達し，頬車穴に沿って上に向かい耳前に出て客主人穴（上関穴）を通過し，髪際に沿って前額正中に達する。肢体外側を行く主脈は缺盆（鎖骨上窩）から下に向かい乳頭正中線に沿って下行し臍の両側（傍ら２寸）を通って鼠径部の気衝穴にいたる。その支脈は，①大迎穴の前から別走し下に向かって頸部にいたり，人迎穴を経てのどに沿って進み缺盆穴に入る。さらに下行して胸にいたり，横隔膜を貫き腹部に入って胃に属し脾と絡する。②胃の幽門部から出ると腹腔を通って気衝穴（鼠径部内側）に達して主脈と交会する。さらに下肢大腿外側前縁に沿って下行し膝部にいたり，再び下肢脛骨外側前縁に沿って下行し足背に達すると第２趾外側端の厲兌穴に進入する。③足三里穴（膝関節外側下３寸）から別れ出て下行し，足背にいたり第３趾外側端に入る。④足背の衝陽穴から別れ出て斜めに進み，第１趾内側端の隠白穴に行って足太陰脾経と連接する。**【本経に現れる主な病証】**主に胃腸の病証として現れる。臨床では足三里穴を取穴することが多い。

❖**阿是穴**（あぜけつ）

天応穴・不定穴ともいう。治療において，病痛のある局所，あるいは圧痛が取穴の根拠となる腧穴を指す。〈『千金要方』〉　阿是穴は経穴の位置に照らして取穴されるわけではなく，患者が訴える痛みによってその位置が定められるので固定的な位置や，位置に対応した固有の名称はない。疼痛のある所に取穴すれば，そこがすべて阿是穴となる。

❖**啞嗽**（あそう）

「啞」とは声がかれることを指す。「啞嗽」とは，咳嗽に声のかすれを伴う証候を指す。〈『類証治裁』咳嗽〉　多くは邪気が肺に鬱結し，肺気が閉塞して不通となったり，あるいは肺気と肺陰が虚損したために引き起こされる。寒邪が肺を閉塞したものは，辛温宣散を治法とし，射干麻黄湯加減を用いる。火熱の邪が肺に鬱閉したものは，清泄肺熱・宣通肺気を治法とし，桔梗湯加減を用いる。肺虚*のもの，気陰の両方を補い，宣肺化痰をはかるため，生脈散加減を用いる。針灸治療では，肺兪・列缺・少商・合谷・太白・太淵・足三里などの経穴に，実証は瀉法で，虚証は補法で刺針を行う。

❖**悪気**（あっき）

①病邪のこと。六淫または疫癘の気などを指す。〈『素問』四気調神大論篇〉　②人体に生じる病理産物を指す。気血が阻滞して生じる瘀濁性の病理産物である。〈『霊枢』水脹篇〉

❖**頞**（あん）

山根のこと。☞山根（さんこん）

❖**暗経**（あんけい）

正常に発育した健康な女性において，終身月経の来潮がまったくみられないにもかかわらず，毎月一定の時期に腰のだるさを訴えたり，また妊娠が可能なことがある。これを暗経という。〈『医宗金鑑』婦科心法要訣〉

❖**按尺膚**（あんしゃくふ）――尺膚を按ず

「診尺膚」ともいう。「尺膚」は，前腕内側の肘関節部から手関節部にかけての皮膚のこと（解剖学的肢位では前腕の前面にあたる）。古代では按尺膚（尺膚を按ず）という診断法があった。これは尺膚部を手で押えたりなでたりすることにより，この部位に変化を感じ取り，そこから疾病を判断するという方法である。外感病で尺膚の熱が強い場合は，多くは温熱証に属している。この方法は現在ではほとんど応用されていない。

❖**按診**（あんしん）

按診は，切診*の一部で，四診*において軽視できない重要な診断法である。按診とは，手を用いて直接患者の身体の一部に触れたり押えたりすることにより，局部の異常な変化を把握し，そのことにより疾病の部位・性質・病状の程度などの状況を推測する診断法である。按診の方法としては，触（触れる）・摸（なでる）・按（押える）の３つがある。臨床では肌膚の按診・手足の按診・胸腹部の按診などがよく用いられている。

❖**安神**（あんしん）

治法。安神法の略称。安神薬を使用して神志*を安定させる治法であり，主に重鎮安神と養血安神に分類される。重鎮安神とは，金属，鉱石，介殻類の薬物を使用して鎮静安神させるもので，陽気躁動（不安定になった陽気が動き回る）・神志不安・心悸失眠などの治療に使用される場合が多く，竜骨・牡蛎・珍珠・朱砂・磁石などが常用される。養血安神とは，滋陰養血安神作用のある薬物を使用するもので，陰血不足に起因する心悸*・怔忡*・失眠*・多夢*・神志恍惚などの病証の治療に使用される場合が多く，酸棗仁・柏子仁・遠志・首烏藤・夜交藤などが常用される。臨床では，常に開竅安神・温胆安神・滌痰安神・養血安神*などの治法と併用される。

❖**安中**（あんちゅう）

治法。安中法の略称で，建中ともいう。中とは中気，すなわち脾胃の気のこと。調理*脾胃薬を使用し，脾胃の気機*を調理安和する治法。主に健脾*・和胃*・調和肝胃などに分類され，脾胃の気機の昇降が異常となった病証に使用されることが多い。人参・党参・黄耆・白朮・茯苓などの中薬が常用される。臨床では，健脾滲湿*・清肝瀉火*・降逆和胃などの治法と併用される。

❖**按法**（あんぽう）

手掌心か掌根を用い，あるいは両手を重ね，患部を垂直に押して圧する治療方法。〈出『素問』〉　病変の状況および部位によって，圧力を加減する。一般には局部に膨満感や疼痛を感じたら中止する。腰背部の急性捻挫・慢性疲労損傷・風湿痹痛などの疾病に適用する。

按　法

【い】

❖**胃**（い）

六腑*のうちの１つ。〈『霊枢』五味篇，玉版篇〉 胃はまた胃脘*ともいい，臍より上で横隔膜の下に位置し，上・中・下の３つの部位に分けられる。胃の上部は上脘といい，噴門が含まれる。胃の中部は中脘といい，胃の本体である。胃の下部は下脘といい，幽門を含む。胃の主要な生理機能は，水穀の受納と腐熟*である。胃は飲食物を接受し収納するので，これを「水穀の海」「五穀の腑」「太倉」ともいう。胃に収納された水穀は，胃の第一段階の消化を経た後，そこに含まれる精微物質が脾の運化*機能によって全身に輸送され，残りの部分は小腸に伝えられる。胃と脾とは経脈が連絡しており，表裏の関係にある。胃と脾の主な機能は，協力し合って水穀を精微に変え，気血津液に化生*して全身に供給することにある。脾胃の機能が正常であることは，生体が生命活動を維持するうえできわめて重要である。胃の機能は一般に「胃気」といい，下降させる作用がある。もし胃気が下降しなければ，胃の機能に重大な影響を与え，飲食減少や食欲不振・脘腹脹満・胃の痞え・疼痛・酸腐臭のあるげっぷをする・嘔吐などの症状が現れる。

▸**胃為水穀之海**（いいすいこくしかい）――胃は水穀の海たり

胃は飲食した水穀を納め入れる器官である。胃は消化管全体の中で最も容量が大きく，大量の水穀を収納することができるので，古人は「水穀の海」という言葉によって，その大きさを形容した。そこで「胃は水穀の海たり」という。〈『霊枢』海論篇〉

▸**胃喜潤**（いきじゅん）――胃は潤を喜ぶ

「潤」は滋潤・潤沢の意味。「胃は潤を喜ぶ」とは，胃はその生理的特性から潤沢な状態がよいということを説明したものである。つまり胃は津液で十分に潤されている状態であれば，正常に水穀を受納し腐熟*することができる。もし辛すぎるものを食べたり，辛燥・苦寒の性質の強い薬物を大量に服用すると，胃中の津液が損傷され，胃の機能が影響を受ける。したがって臨床上胃病を治療するには，薬性が穏やかで潤いのある薬物を用いることが必要である。

▸**胃主降濁**（いしゅこうだく）――胃は降濁を主る

胃の機能の１つ。「降」は通じ降ろす・下降させるという意味。「濁」とは，胃が消化吸収した後の水液と廃用物のこと。「胃は降濁を主る」とは，胃には消化の過程を経た飲食物（食物残渣，水液代謝物）を，胃気によって腸管に下降させる機能があることを説明している。胃は降濁を主り，脾は昇清を主るが，両者が協調し協働することによって飲食物の消化吸収が完成され

る。したがって正常な状態では胃気は下降する。もし胃気が下降しなければ胃脘部の脹満感や疼痛・食欲減退・嘔吐などの症状が現れる。

▶**胃主受納**（いしゅじゅのう）──胃（い）は受納（のう）を主（つかさど）る

胃の機能の１つ。「受納」は，受け入れる・納めるという意味。胃には水穀を受け入れ納める機能があることを指す。〈『景岳全書』飲食門〉 胃の受納機能が正常であれば，食欲は旺盛になる。逆に胃気が虚すと，正常に水穀を受納できなくなるため，胃脘部の脹満・食欲不振・げっぷ・嘔吐などが生じ，はなはだしい場合には食べるとすぐに吐くなどの症状が現れる。

▶**胃主腐熟**（いしゅふじゅく）──胃（い）は腐熟（じゅく）を主（つかさど）る

胃の機能の１つ。「腐熟*」は腐らせ消化するという意味。つまり胃は胃気の働きによって飲食物を消化し，食糜（粥状）に変化させる機能を有することを述べている。胃が腐熟機能を失うと，飲食物が消化されずに胃中に停滞するため，胃脘部の閉塞悶脹感・げっぷの頻発，または食物臭の混じったげっぷが出る・食欲不振などの症状が現れる。

❖**頤**（い）（巻末図21）

頤の外上方から口角の外下方までの区域を指し，左右対称である。

❖**医案**（いあん）

病案ともいい，病人に対する医家の診療記録である。その内容は，病名・症状・兆候・弁証・立法・用薬・経験体得など。往時は診籍とも呼んだ。最も古い医案は，前漢の名医・淳于意の25例の医案である。後世では，『臨証指南医案』や『名医類案』などがある。

❖**胃為水穀之海**（いいすいこくしかい）

──胃は水穀の海たり ⇒［胃］

❖**胃陰**（いいん）

胃陽に相対していうもので，胃中の津液，および胃陽を化生*する物質を含む。

❖**胃陰不足**（いいんふそく）

胃の陰液が不足し，その正常な潤降機能が失調することによって出現する病証を指す。症状としては，口舌乾燥・飢餓感はあるが飲食したがらない・悪心して胃気上逆する・脘腹が煩悶してすっきりしない・大便乾結・小便の量が少ない・舌尖紅少津・脈細数などがみられる。治法は滋養胃陰，処方は益胃湯などを用いる。

❖**畏火**（いか）

少陽相火を指す。『素問』六元正紀大論篇に「四の気を主（つかさど）る気は太陰湿土であり，その場合に主運の上に加わる（加臨する）客気*は少陽相火である。地気は火熱の気を受けて燻蒸する」とあり，これは天に相応する少陽の暑気をいう。

❖**胃家**（いか）

解剖学用語。胃腸系統全般を指し，胃・大腸・小腸を含む。

❖**胃火呃逆**（いかあくぎゃく）⇒［呃逆］

❖**胃咳**（いがい）

咳嗽に嘔吐を伴う証候を指す。〈『素問』咳論篇〉 咳をするたびに嘔吐し，嘔吐がひどいと蛔虫を吐くこともある。治法は和胃安蛔・止咳である。方剤としては，烏梅丸あるいは異功散加味が用いられる。針灸治療では，肺兪・列缺・内庭・梁丘に平補平瀉法で刺針を行う。

❖**胃火牙宣**（いかがせん）⇒［牙宣］

❖**胃火口瘡**（いかこうそう）⇒［口瘡］

❖**胃火歯衄**（いかしじく）⇒［歯衄］

❖**胃家実**（いかじつ）

「胃家*」とは，胃・大腸・小腸の総称である。「胃家実」とは，熱邪が胃と大小腸に結して，津液が損傷を受けることにより引き起こされる病証である。〈『傷寒論』弁陽明病脈証併治〉 主要症状としては，高熱・煩熱・口渇・大汗をかく・洪大脈がみられる。ひどい場合には，潮熱*・腹痛がみられ，押えると痛みが強くなり，大便秘結を伴う。これは，邪熱*と腸中の大便が相互に結び付いたことによる。治療では，攻下燥屎・泄熱通腑気を行う。方剤としては，大承気湯加味を用いる。針灸治療では，合谷・曲池・大腸兪・天枢・気海・足三里・上巨虚などの経穴に瀉法で刺針を行う。

❖**胃火証**（いかしょう）

胃の火証を指す。症状としては，ひどい口渇・歯齦が赤く腫れる・びらん・出血などがみられる。処方としては玉女煎を用いる。

❖**胃火鼻衄**（いかびじく）⇒［鼻衄］

❖**胃脘**（いかん）

①胃腔全般を指し，胃体全体を含む。胃上口の噴門を上脘，胃下口の幽門を下脘，上下口の中間の胃体を中脘という。②経穴名。中脘穴の別名であり，上脘穴の別名でもある。

❖**畏寒**（いかん）

「畏」とは，畏れること。患者が寒さを感じているが，しかし暖房器具などで体を暖めるといくぶん軽減する症状をいう。陽気不足が原因で身体を温養*できないために起こるものが多い。陽虚証に多くみられる。畏寒と悪寒*は，ともに寒さを畏れるが，畏寒は陽虚に属し，悪寒は外感に属するため，患者の覚える「寒気」の質に違いがある。

❖**胃寒呃逆**（いかんあくぎゃく）⇒［呃逆］

❖**胃寒証**（いかんしょう）

平素から胃陽が不足している人が，さらに寒邪を感受したために，寒が胃に凝滞して出現する病証を指す。症状としては，胃脘部が痛んで冷感がある・軽症では長く続いて治らない・重症では拘急して激しく痛む・疼痛は冷えるとさらに悪化し温めると軽減する・味がしない・口渇はない・腸がゴロゴロ鳴る・舌淡・苔白滑・脈弦または遅などがみられる。治法は温中散寒，処方は厚朴温中湯などを用いる。

❖**胃脘痛**（いかんつう）

胃心痛・心下痛とも呼ばれる。すなわち上腹の胃脘部・心窩部に近い部位が常に痛むことを主要症状とする病証を指す。〈㊥『素問』五常政大論篇〉 多くの場合，長期にわたる飲食の不摂生・情志失調・過度の労倦などにより発症する。弁証では，虚証と実証に分ける。寒邪客胃・肝気犯胃・瘀血停胃の多くは，実証に属する。また，胃陰不足・脾胃虚寒の多くは，虚証に属する。治療では，理気和胃・止痛を行う。針灸治療では，足陽明胃経・足厥陰肝経・任脈の経気，および胃の募穴・背兪穴の調節を主とする。胃脘痛は病因病機の違いにより，寒客胃痛*・傷食胃痛*・肝気胃痛*・鬱熱胃痛*・血瘀胃痛*・陰虚胃痛*・虚寒胃痛*などに分類される。

▸**陰虚胃痛**（いんきょいつう）

「陰虚」とは，ここでは胃陰不足を

指す。「陰虚胃痛」とは，胃陰不足により胃が濡養を失い発症する胃脘痛の病証である。症状としては，慢性的な胃痛・口咽乾燥・大便乾結・舌紅・口中の津液が少ない・脈細数がみられる。本病証の多くは，慢性病のため胃陰*を損傷したり，熱病により陰を損傷して，胃陰虚となったり，または胃痛が長期化し鬱熱が内結して傷陰を起こしたりすることによって，胃が濡養を失って発症する。治療では，養胃益陰・和胃止痛を主とする。一貫煎に芍薬甘草湯を合わせたものを主方とし加減を行う。針灸治療では，中脘・内関・足三里・胃兪・金津玉液などの経穴に，補法で刺針を行う。

▸**鬱熱胃痛**（うつねついつう）

「鬱熱」とは，肝気鬱結が慢性化し化熱した状態を指す。「鬱熱胃痛」とは，肝気鬱結が慢性化して化熱し，邪熱が胃腑を侵犯することで，胃脘部の疼痛を起こすものである。症状としては，胃脘部の疼痛と灼熱感・痛みは急性である・口唇乾燥・口苦・煩躁・呑酸・大便秘結・舌紅・苔黄・脈弦数がみられる。治療では，清肝泄熱・理気和胃を主とする。化肝煎・瀉心湯などを主方として加減を行う。針灸治療では，期門・太衝・肝兪・曲池・陽陵泉などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

▸**肝気胃痛**（かんきいつう）

情志*の変調によって，肝気犯胃となり発症する胃脘部の疼痛病証である。症状としては，胃脘部の膨満感と疼痛・疼痛の部位は一定せず，両脇肋部にまで放散する・よくげっぷがでる・排便困難・感情の変化に伴い痛みが生じる・苔薄白・脈沈弦がみられる。本病証の多くは，憂思や悩み・怒りといった情志の変調により，気鬱を起こして肝を傷つけ，そのために肝気が疏泄*できなくなり，横逆して胃を犯し，肝胃の気機が通利*しなくなって発症する。治療では，疏肝理気を主とする。柴胡疏肝散を主方として加減を行う。針灸治療では，期門・中脘・内関・足三里・太衝などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

▸**寒客胃痛**（かんきゃくいつう）

「寒」は外感の寒邪*を指す。「客」は侵犯・停留という意味である。「寒客胃痛」とは寒邪が胃腑を侵すことによって引き起こされる胃脘部の疼痛病証である。症状としては，突然に胃痛が生じる・疼痛は激烈・痛みは温めると好転し，冷やすと悪化する・口は渇かない・苔薄白・脈弦緊がみられる。本病証の多くは，外感寒邪が胃腑を内犯したことが原因となる。寒は収引を主るため，陽気が寒邪により鬱閉して，のびやかでなくなり，それによって気機が阻滞して，胃気不和となり発症する。治療では，散寒止痛を主とする。方剤は良附丸を主方として加減を行う。針灸治療では，中脘・足三里・公孫・神闕などの経穴を用い，瀉法で刺針を行う。あわせて灸も用いられる。

▸**虚寒胃痛**（きょかんいつう）

脾胃の陽気不足により，脾胃が虚寒となって引き起こされる胃脘部の疼痛病証である。症状としては，胃脘部がシクシクと痛む・空腹時の痛みが強い・食事を摂ると緩解する・温めると痛みが和らぐ・揉んだり押したりすると痛

みが和らぐ・食事量が減少する・精神の疲憊・だるさ・大便希薄・手足が冷える・舌淡・苔白・脈沈弱無力がみられる。本病証の多くは，飲食の不摂生や過度の労倦，または慢性病によって脾胃を損傷し，脾陽不足となって中焦に虚寒が生じ，胃が温養*を失うことにより発症する。治療では，温補脾陽・散寒止痛を主とする。黄耆建中湯・大建中湯，あるいは理中丸を主方として加減を行う。針灸治療では，中脘・内関・足三里・脾兪・気海・公孫などの経穴に，補法で刺針を行う。あわせて灸も用いられる。

▸**血瘀胃痛**（けつおいつう）

瘀血内停に起因する胃脘部の疼痛病証である。症状としては，胃脘部の針で刺すような疼痛・疼痛部位を押えると痛みが増強する・食事を摂ると痛みが増強する・紫暗色の血塊を嘔吐する・大便の色は黒い・舌暗紫・脈細渋がみられる。本病証の発病機序は以下の通りである。気は血を先導し，気がめぐれば血もめぐるので，気滞になると血瘀となる。もし情志*がのびやかでないと，気滞が慢性化し，瘀血が内停する。あるいは力みすぎや外傷などによっても血脈が瘀滞して不通となる。不通になれば痛むので，胃脘痛の病証が発症する。治療では，活血化瘀・通絡止痛を主とする。失笑散に丹参飲を合わせたものを主方として加減を行う。針灸治療では，中脘・内関・足三里・膈兪・血海・太衝などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

▸**傷食胃痛**（しょうしょくいつう）

「傷食」は「食によって傷つく」という意味で，飲食による損傷を指す。「傷食胃痛」とは，暴飲暴食によって，飲食物が胃脘部に停滞して発症する胃脘部の疼痛病証である。症状としては，胃痛・胃脘部と腹部の膨満感・げっぷに食物の酸腐臭を伴う・未消化物を嘔吐し，嘔吐後胃痛は緩解する・排便困難・苔厚膩・脈滑実がみられる。治療では，消食和胃・導滞消積を主とする。方剤は保和丸を主方とし加減を行う。針灸治療では，建里・内関・足三里・裏内庭などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

❖**胃気**（いき）

①胃の生理機能を代表する言葉。例えば「胃気は降を主る」といった形で用いられる。通常用いられる胃気とは，実際には脾胃の気（つまり水穀の精微を消化・吸収する脾胃の機能）のことである。これは後天*の本であり，人体の中で重要な役割をもつ。したがって歴代の医家は胃気の保護を大変重要視し，人は胃気があれば生存でき，胃気がなければ生存できないと認識していた。②脈の胃気（つまり脈象に反映された脾胃の機能）を指す。〈『素問』玉機真蔵論篇，平人気象論篇〉 正常な人の脈象は，浮いても沈んでもおらず，速くも遅くもなく，ゆったりと穏やかに，規則正しいリズムを打つ。これを「脈に胃気がある」という。

❖**異気**（いき）

「異」は尋常でないこと。「異気」とは，尋常でない邪気のこと。戻気ともいう。

☞戻（れい）

❖**胃喜潤**（いきじゅん）──胃は潤を喜ぶ ⇒［胃］

❖**胃虚**（いきょ）
病証。各種原因により生じた胃気虧損不足の病症を指す。胃虚では脘腹部の痞満*，納呆*・食少*，大便溏泄*，舌淡苔白・脈細弱などの症状が多くみられる。胃痛・呃逆（あくぎゃく）*・噎膈（いっかく）*・消渇（しょうかち）*・嘔吐などの病では，いずれも胃虚証がみられる。

❖**胃強脾弱**（いきょうひじゃく）
「胃強」とは胃の受納機能が過剰に亢進することを指し，「脾弱」は脾の運化*機能が減退することを指す。人体が健康な状態にあれば胃は受納を主り，脾は運化を主り，両者が協調することによって正常な飲食の消化吸収機能が全うされる。もし胃の受納機能が過剰に亢進し，脾の運化機能が減退すると，両者は協調できなくなり，それによって食欲は旺盛でも食後に腹脹し，大便ははじめは硬いがその後は希薄となる，といった症状が現れる。臨床上，脾約証とも呼ばれる。治法は瀉胃補脾，処方は脾約丸などを用いる。

❖**胃虚嘈雑**（いきょそうざつ）⇒［嘈雑］

❖**育陰**（いくいん）
治法。補陰*法の略称であり，補陰・滋陰*・益陰*・養陰*ともいう。補法の１つで，補陰薬を使用して陰虚証を治療する治法。陰虚の多くは心・肺・肝・腎の四臓と関係するため，補陰法には補心陰・補肺陰・補肝陰・補腎陰などがある。沙参・麦門冬・天門冬・玉竹・女貞子・石斛・百合・旱蓮草などが常用される。

❖**胃経**（いけい）
十二経脈の１つで，足陽明胃経ともいう。下肢前外側および腹部・胸部・顔面頭部の左右に各１本分布し，一側に45穴ある。迎香穴より起こり，頭から足へと走行し，胃に属し脾を絡（まと）い，足太陰脾経と表裏関係にある。本経の腧穴は胃腸など消化系統の病症，頭面・目・鼻・口・歯痛，神志*病および経脈が通過する部位の病症を主治する。

❖**異経選穴法**（いけいせんけつほう）
他経選穴法ともいう。病変のある臓腑や経脈の穴位を用いず，他の経脈の穴位を用いて治療する方法である。例えば，咳嗽・喘息は，通常肺経の経穴を用いて治療するが，代わりに膀胱経の大腸兪を用いて治療するといった方法のことである。任脈の病証である崩漏の治療に，足の太陰脾経の三陰交を用いたりするのも同様の選穴法である。

❖**胃実**（いじつ）
胃腸の積熱・熱盛により津液を損傷し，胃気が滞って，不通になる病証である。〈『脈経』巻二〉 主要症状としては，大便秘結・胃脘部や腹部の脹痛・げっぷなどがある。【詳細】☞ 熱秘（ねつひ）

❖**囲刺法**（いしほう）
散刺法のこと。☞ 散刺法（さんしほう）

❖**胃主降濁**（いしゅこうだく）――胃は降濁を主る ⇒［胃］

❖**胃主受納**（いしゅじゅのう）――胃は受納を主る ⇒［胃］

❖**胃主腐熟**（いしゅふじゅく）――胃は腐熟を主る ⇒［胃］

❖**胃消**（いしょう）
中消のこと。〈『弁証録』消渇門〉 ☞ 中消（ちゅうしょう）

❖**痿証**（いしょう）
痿躄（いへき）ともいう。「痿」とは，肢体が萎えて各種身体機能が低下した状態を指す。「痿証」とは，肢体の筋肉が弛緩・

弱化し，病の進行とともに萎縮する病証を指す。〈㊥『素問』痿論篇〉 臨床症状は，初期には下肢の脱力感がよくみられ，徐々に手足が弱化し，皮膚・筋肉が痺れて感覚がなくなり，皮膚は乾燥し光沢がなくなっていく。重篤になると手は物を持てず，足は身体を支えることができなくなり，肘・腕・膝・足などの関節は脱臼したかのように力が入らなくなる。続いて，筋肉は萎縮し，意識的にコントロールすることができなくなる。本病証は，①温熱毒邪を感受して，肺津が灼傷される，②湿熱が経脈に侵入し，気血が阻滞し，筋肉が栄養を失う，③脾胃虚弱によって気血の生成が障害される，④肝腎の虚損により，筋肉が栄養を失う，などの要因により発症する。治療は，後天*の元気を主る脾胃の補益*を基本原則とする。このほか，虚実弁証にもとづいて，清肺生津・清熱利湿・補脾益気・補益肝腎などの治法を加えて治療する。針灸治療は，足陽明胃経と手陽明大腸経の気血を調整することを主眼とする。病因と症状により，痿証は肺熱致痿*・湿熱発痿*・脾胃虚痿*・肝腎虧痿*・脈痿*・筋痿*・肉痿*・骨痿*・皮毛痿*などに分類される。

❖**胃・神・根**（い・しん・こん）

正常な脈象の３つの特徴。「胃」とは胃気を指す。脈象が浮きも沈みもせず，速くも遅くもなく，ゆっくりとして穏やかであり，リズムが一定しているのは，胃気の象である。いかなる病脈であっても，穏やかな象さえあれば胃気が存在している現れである。「神」とは，脈象に神があることを指す。すなわち脈象が柔和で有力であるものをいう。微弱な脈であっても弦実の脈であっても，脈中に柔和な象があれば，脈に神があるという。「根」とは，脈の根源を指し，尺脈を沈取して有力であること。病状が重篤であっても尺脈を沈取できれば，生存の機会があり，回復好転する希望があることを示している。したがって脈象の胃・神・根を診察することは，正気の盛衰・疾病の程度・予後の吉凶を判断する重要な方法である。ただし診脈時には，胃・神・根の３つを切り離してとらえてはならない。一般的には脈拍がゆっくりとして穏やかであり，リズムが一定し，柔和で有力である状態を，胃・神・根３者の総合的な現れとしている。これは人体の胃気が充足しており，正気が強いことを表している。

❖**胃心痛**（いしんつう）

胃脘痛のこと。〈『霊枢』厥病篇〉 ☞胃脘痛（いかんつう）

❖**遺精**（いせい）

性行為以外の局面で精液が漏れる病証を指す。〈『普済本事方』巻三〉 失精ともいう。遺精は２つに分類され，睡眠時に夢をみて精液を漏出するものを夢遺*といい，覚醒時に精液を自然に漏出するものを滑精*という。多くは心腎不交・腎気不固などが原因で起こる。また少数ではあるが，湿熱が下注し精室を乱した場合に起こることもある。心腎不交の症状は，夢遺・めまい・腰のだるさ・動悸・精神疲労・黄赤尿で熱感がある，舌尖紅・苔微黄・脈細数などである。腎気不固の症状は，精液が容易に滑出する・顔色㿠白（白くて浮腫がある）・精神不振・めまい・腰の

だるさと痛み・舌質淡・苔白・脈沈弱などである。湿熱下注の多くは，口苦・黄赤尿・舌苔黄膩などの症状を伴う。治療では虚実の弁別に注意し，実証に属するものに対しては清心・利湿泄熱を主法とし，虚証に属するものに対しては養心・補腎固渋を主法とする。針灸治療では，足少陰腎経・手少陰心経・任脈の経気の調整を主に行う。臨床上では一般に夢遺*・滑精*・心腎不交遺精*・湿熱下注遺精*・労傷心神遺精*・腎虚滑脱遺精*などに分類される。

▶**湿熱下注遺精**（しつねつかちゅういせい）

湿熱が下焦に注ぎ，精室を乱すことによって起こる遺精*病証を指す。主要症状としては，遺精・口苦口粘・煩躁不眠・黄赤色尿・舌紅・苔黄膩・脈滑数がみられる。治療は，清熱利湿を主法とし，程氏萆薢分清飲を主方に加減して用いる。針灸治療は，腎兪・太谿・太衝などの経穴に平補平瀉法で刺針を行う。

▶**腎虚滑脱遺精**（じんきょかつだついせい）

腎精不足のために精液が固定されずに起こる遺精*病証を指す。主要症状としては，頻繁に起こる夢精・ひどいときには夢と関係なく自然流出する・腰膝のだるさや無力感・めまい・かすみ目・耳鳴り・不眠・健忘・心煩・のどの乾き・頬の紅潮・寝汗・舌質紅・舌苔少・脈細数などがみられる。病因の多くは，虚弱体質あるいは過度の自慰や性交によって腎の精気を損ない，陰虚陽亢となって虚熱が精室を乱すために夢精する。あるいは，遺精が慢性化して精気が滑脱し，腎が精を蔵することができなくなって精液が固定されず，頻繁に遺精を起こすものもある。治療は，補腎精・固渋精液を主法とし，六味地黄丸または左帰丸を加減して用いる。針灸治療は，腎兪・関元・三陰交・大赫・気海などの経穴を選び，補法で刺針を施す。刺針後に灸法を併用してもよい。

▶**心腎不交遺精**（しんじんふこういせい）

「心腎不交」とは，心陽と腎陰の生理的バランスが崩れることで，心火亢盛・腎陰不足のいずれによっても誘発される。「心腎不交遺精」とは，心火が盛んになるために腎陰が灼傷されて起こる遺精*病証を指す。主要症状としては，夢精・不眠・夢を多くみる・心中の煩熱・気疲れ・めまい・かすみ目・動悸・記憶力低下・口が乾く・尿量減少・舌質紅・舌苔少・脈細数などがみられる。病因の多くは，ストレスや精神疲労によって心火が亢ぶり腎陰を傷つけ，睡眠時に心神が安定せず，火邪が精室を乱し，陰精が留まる所を失って夢とともに流出することに起因する。治療は，清心泄火・滋陰安神を主法とし，黄連清心飲を主方に加減して用いる。針灸治療は，神門・心兪・太谿・志室などを選穴し，平補平瀉法で刺針を行う。

▶**労傷心神遺精**（ろうしょうしんしんいせい）

思慮過度・心神の過労によって起こる遺精*病証を指す。主要症状としては，疲労すると精液が漏れる・動悸・不眠・夢を多くみる・健忘・顔色は黄色く艶がない・食欲不振・大便希薄・身体がだるい・舌質淡・舌苔薄白・脈虚弱がみられる。本病証の多くはもともと虚弱体質なうえに，肉体疲労や気疲れが重なって脾気を損傷し，そのた

め心神不安を起こし，気虚のために精液を固摂*できないことにより発生する。治療法は，補脾養心・益気昇清・固渋*が主法となり，処方は妙香散を加減して用いる。針灸治療は，脾兪・心兪・神門・三陰交・志室などを選穴し，平補平瀉法で刺針を施す。

❖**遺泄**（いせつ）

遺精のこと。〈『三因極一病証方論』虚損証治〉

☞遺精（いせい）

❖**一陰**（いちいん）

①厥陰を指す。また足厥陰肝経を指す場合，手厥陰心包経を指す場合，手足厥陰の総称を指す場合がある。②太陰・厥陰・少陰の三陰全体を指す（三陰経をまとめた名称）。

❖**委中毒**（いちゅうどく）

俗称を曲鰍（きょくしゅう）という。膝窩部にある委中穴の部位に発生する急性の化膿性疾患である。〈『瘍医準繩』巻四〉 臨床症状は，初期には委中穴の部位に違和感を覚え，そのあとに皮下に結節や腫瘤が現れ，次第に増大していく。そして皮膚の腫脹・疼痛・発赤，下腿の屈伸機能の制限が現れ，発熱・悪寒・四肢が痛みだるい・口渇・尿量減少・濃黄色尿・舌紅・苔黄膩・脈滑数などの全身症状を伴う。病変が進展すれば，腫瘤は化膿する。膿疱が破れ，澄んだ膿汁が流出するが，膿汁が完全になくなれば，次第に瘡口は癒合していく。本病は現代医学の膝窩部の急性化膿性リンパ節炎に類似している。主な原因は，湿熱や寒湿などの邪気の外感であり，邪気は経脈を通って膝窩部に集まる。また長い間の抑うつや怒りのために肝気が鬱結すれば，やがて火毒に変わり，それが経脈を通って膝窩部に停滞する。また辛いものや脂っこいものを食べすぎたために脾胃の運化機能が失調した場合も，湿熱が発生して膝窩部に集まり，患部の気血を凝滞させる。内治法は，活血化瘀・清熱利湿解毒が原則であり，萆薢滲湿湯加減を服用する。化膿後は，解毒排膿が原則であり，透膿散加減を使う。外治法は，初期には衝和膏を，腫痛が強いものには金黄膏を塗り，化膿すれば切開して膿汁を排出させる。膿疱が破れれば，八二丹を粘着させた薬線を瘡口に挿入し，膿汁を引流する。膿が完全になくなれば，生肌玉紅膏を塗る。針灸治療は，復溜・陽陵泉・足三里・承山・環跳などに瀉法で刺針する。

❖**胃中の振水音**（いちゅうのしんすいおん）

胃の中でポチャポチャと水の音がすること。痰飲*の病証でよくみられる。

❖**一陽**（いちよう）

①少陽を指す。また足少陽胆経を指す場合，手少陽三焦経を指す場合，手足少陽の総称を指す場合がある。②太陽・陽明・少陽の三陽全体を指す（三陽経をまとめた名称）。

❖**溢**（いつ）

寸口を越えて魚際まで上る脈象を指し，気の有余を主る。『内経』における十二脈の１つ。

❖**溢飲**（いついん）

水飲が四肢の肌肉*・皮下に溢れる一種の病証を指す。〈『素問』脈要精微論篇〉

飲証の一種で，主要症状には，身体の疼痛・浮腫と重だるさ，あるいは咳喘などがある。また悪寒・悪風・無汗などの表証・口が渇かない・苔白・脈

弦緊などもみられる。その病因は外感風寒であり，汗孔が閉塞し，肺と脾が正常な水液の輸布を行えなくなるために，水飲が四肢の肌膚に溢れる。治療では，解表発汗・温肺化飲を主とする。大青竜湯，あるいは小青竜湯を主方として加減を行う。針灸治療では，肺兪・脾兪・列缺・合谷・委陽などの経穴を用い，平補平瀉法で刺針を行う。

❖**噎膈**（いっかく）

噎塞・膈塞とも呼ばれる。〈『済生方』巻二〉「噎」は，飲食物を嚥下するときに「つまる」ような感覚があることを指し，「膈」とは胸膈が閉塞し食物が下らないことを指す。噎は膈の前駆症状である。本病証の多くは，長期にわたるストレスや偏食・過食，またはアルコール類の摂りすぎにより肝気の鬱結を引き起こすことが原因となる。これにより脾胃虚弱となって，津液が集まり痰になり，そこから気結*が慢性化して血瘀を起こし，痰・気・瘀が互いに食道で結び付いて，胃気を阻隔することで発症する。本病証の治療では，まず虚実を弁別する。噎膈の初期では多くの場合，標実が主となる。気結・瘀阻・血瘀といった病因の違いにより，それぞれに治療を行う。噎膈の末期では本虚が主となる。津虚と陽衰を見分けて治療を行う。針灸治療では，足陽明胃経・足太陰脾経・足厥陰肝経・足少陰腎経の経気調節を主とする。本病は，痰気交阻噎膈*・陰虧熱結噎膈*・瘀血阻滞噎膈*・気虚陽微噎膈*などに分類される。

▸**陰虧熱結噎膈**（いんきねつけついっかく）

胃陰虧虚により胃腸に熱が集まることによって生じる噎膈*の病証である。症状としては，嚥下時の梗塞感や疼痛・液体は飲み込めるが固体の食物をなかなか飲み込めない・口咽乾燥・大便は乾燥して出渋り，なかなか排便できない・体が徐々に痩せてくる・手掌や足裏の熱感・心胸煩熱・心窩部が熱くなる・舌紅で少津，あるいは裂紋がある・脈弦細数がみられる。本病証の多くは，辛いもの・燥熱のものの過剰摂取により，陰津を損傷して胃陰虚となり，そこから陰虚熱盛となって熱が胃腸に集まり，食道が濡養を失うことで発症する。治療では，養胃生津を主とする。方剤としては，五汁安中飲を主方として加減を行う。針灸治療では，胃兪・膈兪・膻中・太衝・金津・玉液・曲池などの経穴に，平補平瀉法で刺針を行う。

▸**瘀血阻滞噎膈**（おけつそたいいっかく）

瘀血が内結して，食道を阻むことで，引き起こされる噎膈*の病証である。症状としては，胸膈の梗塞感と疼痛・飲食物が下らない・食後すぐ吐く・大便の乾結・暗赤色の物を吐く・皮膚は荒い・顔色は艶がなく暗い・体が痩せる・舌紫紅・少津・脈細渋がみられる。本病証の多くは，ストレスや激怒によって肝気を損傷して，肝気鬱結となることが原因である。それによって気鬱となると，血液が運行不暢となり，それが長期化すると瘀を形成し，内結した瘀血が食道を阻むことで発症する。治療では，養血活血・行瘀散結を主とする。方剤としては，通幽湯を主方に加減を行う。針灸治療では，膈兪・血海・胃兪・太衝などの経穴に，平補

平瀉法で刺針を行う。

▸**気虚陽微噎膈**（ききょようびいっかく）

脾胃および脾腎の陽気が衰退することで引き起こされる噎膈*の病証である。症状としては，嚥下困難・精神疲労・顔面および四肢の浮腫・腹部膨満感・清水や痰涎を嘔吐する・息切れ・冷えることを嫌がる・顔色は㿠白（白くて浮腫がある）・舌淡・苔白・脈細弱がみられる。本病証の多くは，噎膈が慢性化して陰が損傷し陽衰を引き起こすことが原因となる。それに伴って腎の精気も消耗し，脾の生化が衰退して脾胃および脾腎の陽気が弱り，津液が正常に輸布できなくなって発症する。治療では，脾腎の陽気の温補*を主とする。温脾には補気運脾湯を主方とし，温腎には右帰丸を主方とする。針灸治療では，脾兪・腎兪・気海・関元・足三里・膈兪などの経穴に，補法で刺針を行う。

▸**痰気交阻噎膈**（たんきこうそいっかく）

痰と気が食道で交わることで引き起こされる噎膈*の病証である。症状としては，嚥下困難・梗塞感・胸膈がつまる・口咽乾燥・舌質やや紅・苔膩・脈弦滑がみられる。本病証の多くは，長期にわたるストレスにより脾を損傷することが原因となる。脾が損傷すると気が結し，気結*によって津液が輸布できなくなり，これが集まって痰となり，痰と気が食道に交わって阻むことにより，食道の気機が通じなくなって発症する。治療では，理気解鬱・化痰散結・潤燥を主とする。方剤としては，啓膈散を主方として加減を行う。針灸治療では，肝兪・脾兪・期門・豊隆・膈兪などの経穴に，瀉法で刺針を行う。

❖**一進三退**（いっしんさんたい）

古代刺針法の一種。《『針灸大成』》 一進三退とは皮下から骨部までを浅層・中層・深層の３層に分け，一度に深部まで針を刺入し，その後，３層に分けて皮下まで退針するという方法である。進針や退針の操作は提挿や捻転の手技を併用しながら行うこともできる。

❖**噎塞**（いっそく）

噎膈のこと。《『備急千金要方』巻十六》 ☞噎膈（いっかく）

❖**痿軟舌**（いなんぜつ）

舌体が軟弱で無力となり，舌を意志によって自在にコントロールできない状態をいう。病的な舌象である。気血の虚や陰津の不足により筋脈失養となって起こるものが多い。舌質が乾いていて紅色であり，かつ舌体が痿軟であるものは，熱邪により津液を損傷して起こるものが多く，新病であることが多く，経過は短い。舌質が紅絳であって舌体が痿軟であるものは，陰液虚損が相当悪化していることの現れである。舌質が淡白であって舌体が痿軟であるものは，気血両虚によるものが多い。後の２者は久病によるものであり，経過は長い。

❖**遺尿**（いにょう）

①尿失禁のこと。本病の多くは，腎陽の不足・脾肺気虚・肝経の湿熱などによって膀胱の気化機能が失調することによって起こる。治療は，温腎固渋あるいは瀉肝清熱が原則となる。針灸治療では，任脈と膀胱経の背兪穴の気血を調補する。臨床上は病因の違いにもとづいて，腎陽不足遺尿*・脾肺気

虚遺尿*・肝経鬱熱遺尿*に分類される。②３歳以上の小児の経常的な寝小便癖のこと。

▸**肝経鬱熱遺尿**（かんけいうつねついにょう）

肝経の鬱熱に起因する遺尿*をいう。臨床症状には次のようなものがある。夜尿・小便は黄色く生臭い・イライラする・夜間の歯ぎしり・顔や唇が赤い・薄黄苔・脈は滑数。本病証の多くは次のような機序で発生する。ストレスにより肝気が鬱結し，肝経に鬱熱が生じ，疏泄*機能が亢進し，膀胱が水液を貯蔵できなくなって本病証を生じる。治療は瀉肝清熱が原則で，竜胆瀉肝湯加減を用いる。針灸治療では，関元・三陰交・膀胱兪・太衝・中極などに平補平瀉法で刺針する。

▸**腎陽不足遺尿**（じんようふそくいにょう）

腎陽欠虚に起因する遺尿*をいう。臨床症状には次のようなものがある。夜尿・顔色が白い・寒がり・手足が温もらない・足腰がだるく力がない・尿は透明で排尿に時間がかかる・排尿回数が多い・舌淡・脈沈遅無力。本病証の多くは次のような機序で発生する。もともと虚弱で腎陽が不足している者が，下焦虚寒・膀胱虚冷となり，水道の制御不能が生じて本病証を生じる。治療は温腎固渋が原則で，桑螵蛸散合鞏堤丸加減または八味丸合桂枝加竜骨牡蛎湯を用いる。針灸治療では，関元・中極・三陰交・腎兪・膀胱兪を補法で刺針し，抜針後灸を加える。夜尿点（手掌面で小指の遠位指節間関節の横紋の中央）に補法で刺針してもよい。

▸**脾肺気虚遺尿**（ひはいききょいにょう）

脾肺気虚に起因する遺尿*をいう。臨床症状には次のようなものがある。夜尿・排尿の回数は多いが尿量は多くない・食欲不振・顔色が白い・疲れやすく力がない・軟便または下痢・舌淡・脈緩。本病証の多くは，体質的に虚弱で脾肺気虚があり，膀胱を約束する（取り締まる）ことができないために生じる。治療は益気固渋が原則で，補中益気湯合縮泉丸加減または桂枝加竜骨牡蛎湯合六君子湯を用いる。針灸治療では，関元・中極・三陰交・脾兪・肺兪・膀胱兪・百会などに補法で刺針する。

❖**遺溺**（いにょう）

遺尿のこと。《『素問』宣明五気篇》 ☞遺尿（いにょう）

❖**胃熱**（いねつ）

病証。各種原因により生じた胃実熱証を指し，胃火ともいう。胃熱の多くは，辛いものや味付けの濃い食事を偏食しているため平素から胃火が旺（さか）んになっている，または邪熱犯胃，または気鬱化火によるものであり，症状としては胃脘部*の灼熱痛，呑酸・嘈雑*，口渇*・口臭，または渇して冷たいものを飲みたがる，消穀善飢（しょうこくぜんき）*，または歯齦の腫痛，口腔の糜爛，小便は赤色で少量，大便秘結，舌紅・脈数などが現れる。

❖**胃熱証**（いねつしょう）

邪熱*が胃を犯すか，辛いものや熱性のものの過食によって引き起こされる病証を指す。症状としては，胃脘部が痛み灼熱感がある・口渇して冷たい飲みものを喜ぶ・食事の量が突然増加する・食べてもすぐに空腹感を感じる・口臭・大便秘結・舌紅・苔黄・脈滑数などがみられる。治法は清胃瀉火を主とし，処方は清胃散を用いる。

❖**胃熱嘈雑**（いねつそうざつ）⇒［嘈雑］

❖**胃熱吐血**（いねつとけつ）⇒［吐血］

❖**胃の大絡**（いのたいらく）

虚里ともいう。胃から直接別れ出ている大きな絡脈。〈『素問』平人気象論篇〉 しかし，足陽明胃経から分離する絡脈ではないので，十五絡脈ではない。循行経路は，胃から出て上行し，横隔膜を貫いて肺臓に連絡した後，外に向かって出，左乳部下方つまり心尖拍動部に散らばる。

❖**胃反**（いはん）

反胃のこと。〈『金匱要略』嘔吐噦下利病脈証治〉 ☞反胃（はんい）

❖**痿病**（いびょう）

疾病名。〈㊥『素問』痿論篇〉 四肢，特に下肢の筋脈が弛緩し，筋力がなくなって力が入らず，さらに長期化すると動かせなくなり，次第に肌肉が萎縮して随意運動ができなくなることを主要症状とする。

❖**異病同治**（いびょうどうち）

「異病」とは，異なる病証を指す。「同治」とは同一の治療方法を用いること。「異病同治」とは，異なる病証に，その進行段階で同一の病機または証が現れた場合，これに同一の治療法を用いることである。例えば，脾虚の下痢・脱肛・子宮下垂などは異なる病証であるが，弁証を通じ，その病機がみな中気下陥に属すると認識された場合，それらにはすべて補中益気の治療方法を適用することができる。☞治病求本（ちびょうきゅうほん）

❖**胃不和則臥不安**（いふわそくがふあん）

――胃和（いなご）まずんば則（すなわ）ち臥（が）して安（やす）んぜず

「胃不和」は，胃気の正常な和降ができないこと，「臥して不安」とは，正常な睡眠ができないことを指す。全体的な意味は，飲食の不摂生などの原因によって，胃気の正常な和降ができなくなり，かえって上逆*して心神を擾乱し，不眠が出現する病証を指す。〈『素問』逆調論篇〉 治法は和胃降逆，処方は温胆湯を用いる。

❖**痿躄**（いへき）

すなわち痿証*のこと。「痿」とは，肢体が萎えて各種身体機能が低下した状態を指し，「躄」とは，下肢が弱化して，歩行できない状態をいう。〈『素問』痿論篇〉 痿証では，下肢の衰弱および機能低下が顕著であるため，痿躄の名がある。☞痿証（いしょう）

❖**胃呆**（いほう）

納呆のこと。☞納呆（のうほう）

❖**圍薬**（いやく）

箍圍薬のこと。〈㊥『瘡瘍経験全書』巻九〉 ☞箍圍薬（こいやく）

❖**胃陽**（いよう）

胃の陽気のこと。胃には陰と陽の両面がある。胃陽は胃陰*と相対する意味で用いられる言葉である。〈『臨証指南医案』脾胃〉 胃は胃陽と胃陰という陰陽二気の平衡を保つことにより，水穀を受納・腐熟*し，濁気を和降する機能を正常に発揮することができる。もし胃の陽気が不足すると寒証が生じ，正常に水穀を腐熟し濁気（廃用物）を下降・排泄することができなくなるため，胃脘部の脹痛または冷痛・食欲不振・透明で薄い涎を吐くなどの症状が現れる。

❖**医話**（いわ）

医家が随筆・短文・筆記などの形式を用いて，医学理論を論述したり，臨